

<<口頭発表>> (9月3日 10:00-10:30)

【8号館4F 843教室】

A typological study of preferred order on binomials
—A case study of “MALE-FEMALE” order—

OH YOUNGMIN, KJ NABESHIMA

This study investigates the similarities and differences in order preference of binomials, and elaborates on MALE-FEMALE order from a typological perspective. Two tendencies are observed; 1) Indo-European Languages (English, French, German, Italian, and Serbian) have certain common constraints of word ordering; 2) although Chinese, Japanese, and Korean do not belong to the same language family, it seems that they also have similar linguistic constraints on the word ordering. This could be explained by cultural interactions such as a common Chinese script. Regarding **MALE-FEMALE** order, this appears to be relatively less stable over the languages with 73% probability in matching preferred order. This is because the order is firm in the Northeast Asia languages, while it is less settled in the Indo-European languages. In addition, in Sinhalese and Turkish **FEMALE-MALE** order is that of a dominant position.

<<口頭発表>> (9月3日 10:35-11:05)

【8号館4F 843教室】

Learning from a Conversation Analytic Perspective

バターフィールド ジェフリー

Previous conversation analytic studies have addressed the topic of learning (e.g., Mori, 2004), but because the majority of them lack a traceable learning object, skepticism regarding the ability of conversation analysis to demonstrate learning remains. This presentation adopts a conversation analytic perspective and attempts to demonstrate how conversation analysis can be used as a tool to demonstrate how learning occurs in second language interaction in a university language lounge at a private university in Japan. This study shows how language learners demonstrate a problem of understanding, a change of state as shown through their use of change of state tokens such as "oh" (Heritage, 1984), and that they have learned something as illustrated by their application or explanation of the traceable learning object in the subsequent interaction. This study argues that conversation analysis can be used as a tool to demonstrate how and where learning occurs.

<<口頭発表>> (9月3日 11:10-11:40)

【8号館4F 843教室】

大学院研究指導場面における「助言」会話の分析
—相手に配慮した「助言」の観察—

高橋 千代枝

本稿は、大学院の教員の研究室において行われた研究指導場面の会話を分析したものである。「専門家」として「専門家の卵」に助言を与える際、教員がある程度専門の知識を身に付けた院生に特別な配慮をして助言を行っていることが観察された。これまで助言については、相手のことを思いやる良いことだとされる一方で、アドバイスされて不快に思った経験についての研究がなされるなど、その性質の複雑さから実際の助言会話がどのように行われているかは明らかにされていない。本稿は様々な場面で行われる助言会話のうち、相手への特別な配慮を表しつつさらに良い方法を提示する助言会話の実態を明らかにするものである。

<<口頭発表>> (9月3日 11:45-12:15)

【8号館4F 843教室】

相互行為装置としての「じゃない(か)(?)」
—2つの出現位置に着目して—

梅村 弥生

本研究の目的は、Koshik(2005)らが明らかにした否定の形式を持ちながら肯定の意味を持つ、いわゆる極性反転疑問文(Reserved Polarity Question)が、日本語会話においても相互行為を組織する資源として用いられていることを、会話分析の手法を用いて明らかにすることである。本研究では、PRQが出現する位置に注目し、そこでどのような行為が達成されているかを明らかにする。実際の日常会話を用いて、参加者らが直面する課題を解決するためにこの形式を利用しているのである。具体的には、連鎖が開始されたところで産出されるRPQ形式とすでに開始されるなかで産出されるRPQ形式である。前者は会話の進行を促すようにして産出されるもので、後者は行為の進行に抵抗するように産出される。本発表では、2つの共通点と相違点、また同じ位置であっても微妙に行為が異なる事例を明らかにする。

<<口頭発表>> (9月3日 10:00-10:30)

【8号館4F 844教室】

具体から抽象への意味の拡張

— I want～. と I want to be～. の二構文に着目して—

小林 邦子

本発表では, I want ～. と I want to be ～. の二構文に着目して, 目的格に使用される形容詞の具体性から抽象性への年齢的発達傾向を考察する. 次段階では二構文におけるスキーマ的な意味の拡張の分析を試みる.

池上(1981)によれば, 幼児からの言語獲得として, 常に名詞や動詞は抽象の前に具体があるとしている. このことを, 大学生による回答文を通して, 形容詞における年齢的な発達に視点を当て, 発達傾向を見ようとする.

また, 二構文を比較し池上(1981)による場所理論にLangacker (2002)の述べるトラジェクター(Trajector)とランドマーク(Landmark)を援用して, 二構文の空間的・時間的拡張についての考察を行う.

<<口頭発表>> (9月3日 10:35-11:05)

【8号館4F 844教室】

無生物主語使役文の認知的研究

李 静

使役文については「人を使って仕事をさせること. 他人にある行為をさせること」(広辞苑第五版)又は「他人にある動作を行わせたり, 事態を引き起こさせたりする意を表わす形式」(新明解国語辞典第五版)などと定義付けられている. 一般的に, 使役者は人間あるいは命を持っている生物に限られる. 無生物が使役者になる使役文は数少ないと言われているが, 言語使用上存在するのは事実である. 例えば, 「彼の小さな希望は深夜の空気を清らかに震わせた」「雨期でもないのに降り続く雨は, 大気を冷やして農作物を腐らせる」このような無生物主語使役文が成り立つ理由は何であろうか. どう説明すれば外国人学習者は理解しやすいであろうか. そのためにも, 無生物主語使役文を深く考察する必要がある.

<<口頭発表>> (9月3日 11:10-11:40)

【8号館4F 844教室】

新聞社説におけるテキスト構造の日中対照研究
—結束性を中心に—

単 艾婷

本稿では、テキスト性を支える構造的要因の一つである「結束性」、特にその中の「接続語句」と「指示語」に着目し、日中両言語の新聞社説におけるテキスト構造を明らかにすることを目的とする。日本語の『朝日新聞』と中国語の『新京報』の30篇の社説から、それぞれのテキストにおける「接続語句」、「指示語」の用例を集め、その使用傾向と特徴を分析した。その結果は以下の通りである。①接続語句について、日本語の社説は「逆接型」>「添加型」>「順接型」であり、中国語の社説は「逆接型」>「順接型」>「添加型」の順であった。日中両言語の社説における論理構造の差異が観察された。②指示語について、日本語の社説には「コ系列」と「ソ系列」共に多く見られるのに対し、中国語では圧倒的に「这zhe(コ系列)」が多く、また「这zhe(コ系列)」の古語「此ci」も多用されていることが分かった。

<<口頭発表>> (9月3日 11:45-12:15)

【8号館4F 844教室】

補助動詞の多用と「横志向」

—接客場面に注目して—

山本 裕子

敬語の使い方が上下による使い分けから親疎による使い分けへと変化していることが指摘されている。本発表では「いただく」「もらう」といった授受補助動詞に限らず、接客的な場面を中心に補助動詞が多用されていることに注目し、実例の観察および質問紙調査を通してこれらの使用も「横方向への変化」の現れの一つであることを示す。

接客場面を中心に「(料理番組)ここで塩コショウをしていきます。こんな感じで入れちゃいましょう。」「(美容院で)こうやってドライヤーを当ててあげるといいですよ。」のような補助動詞を含んだ表現の多用が目につく。これらを「横志向」が強いと思われる大学生はどのように捉えているか、大学生100名を対象に質問紙調査をおこなったところ、多くの場面で補助動詞が選択され、またそれらの多くが、柔らかく、親しみがあり、明るいものと捉えられていた。このように補助動詞の多用は横志向に合致していることが示された。

<<口頭発表>> (9月3日 10:00-10:30)

【8号館5F 852教室】

依頼しにくい場面における依頼会話の談話構造
—ベトナム語と日本語の依頼会話を分析して—

NGUYEN THI NHU Y

本研究では、友人に高額のお金を借りるという依頼しにくい場面について、日本語とベトナム語の依頼会話を談話構造の観点から分析した。その結果、《依頼部》の前の《雑談部》については、両言語とも依頼対象である「お金」と直接的に関係のある話題ではなく、依頼対象と関連づけやすい話題を被依頼者に提供することで依頼会話を始めていた。しかし、ベトナム語では、被依頼者に依頼対象に興味を持たせるような形で話題を提示することで被依頼者から【状況説明要求】や【依頼申し出】などが得られ、【依頼】を行わなくても依頼目的が遂行されていたのに対して、日本語では【依頼申し出】が見られず、【依頼】が成り立つかどうかはその後の《依頼部》での依頼者の【状況説明】と【状況確認】の進め方にかかっていた。ベトナム語母語話者は、【依頼】を明示的に行うことを避け、依頼会話成立の決定権を被依頼者に譲る形で配慮を示していたと言える。

<<口頭発表>> (9月3日 10:35-11:05)

【8号館5F 852教室】

日本語とアメリカ英語の依頼場面における依頼のコンテキストの依頼表現とポライトネスレベルへの影響

藏屋 伸子

本研究では、日本語とアメリカ英語の映画から抽出した業務上中心の依頼場面の談話データを分析した。依頼のコンテキストは、依頼表現とそのポライトネスレベルに日本語と英語で同様に影響を与え、言語や男女間でその影響の大きさが異なっていると言える。緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷、利益、上下関係、親疎を変数としてそのレベルによって定義した依頼のコンテキストの影響を、依頼表現の命令文、平叙文、疑問文、省略の4つの文形式の分布と敬語比率によって判断したポライトネスレベルの変化で分析した。その結果、言語間の違いは、日本語と英語における発想の違いとなっている個人主義と集団主義(Triandis, 1995)等を根拠とするとうまく説明できることを確認した。従って、個人主義と集団主義の違いを意識しながらポライトネスレベルの変化量を調整すれば、日本語と英語の間での違いを超える無難な依頼表現を選択できると期待できる。

<<口頭発表>> (9月3日 11:10-11:40)

【8号館5F 852教室】

話し手は自らの解釈, 感覚をどう伝えているか
—会話における「なんか」の使用に着目して—

杉崎 美生

「なんか」はこれまで「発話を和らげる」「発話の時間を稼ぐ」などの機能が研究されてきた(田窪・金水1997, 鈴木2000, 飯尾2006)が, なぜこの語が頻繁に使われるのかは未だ明らかではない. 本発表では, 会話データから「なんか」と共起する語の言語学的特徴を観察し, この語を頻繁に使うことで話し手は何を伝えているのかを考察する. 分析の結果, 特徴的な5つの型, 1) 代名詞的「なんか」, 2) 副詞的「なんか」, 3) 心内発話, 引用と共起する「なんか」, 4) オノマトペと共起する「なんか」, 5) エピソードの開始に現れる「なんか」が抽出された. その中で, 「なんか」には「このように思うんだけど」, 「そんな風に感じたんだけど」という, 話し手の解釈やイメージを表す働きが認められた. 「発話を和らげる」, 「発話をつなぐ」機能に留まることなく, 話し手の解釈やイメージを伝えるという重要な働きが, 「なんか」を発話する動機となることを主張する.

<<口頭発表>> (9月3日 11:45-12:15)

【8号館5F 852教室】

「評判」というアイデンティティ
—あるナラティブ・セラピーにおける人種に関わる評判とアイデンティティの交渉—

饒平名 尚子

米国で録画されたナラティブ・セラピーにおける「トラブル少年」と「良い少年」の「評判」をめぐる語りと人種問題、アイデンティティの変化を探る。白人男性セラピストと、アフリカ系アメリカ人の少年と母親のセッションでは、社会権力を持つ主流派(白人の親、学校長、裁判官等)によっていかに少年が悪いかが語られ、それが社会のドミナント・ストーリーと深く結びついていた可能性が示された。本研究では評判の生成において1)語り手の社会階級や人種が与える影響、2)事実の一部分が歪曲して伝わることの影響、3)当事者を直接知らない人々の間にも評判が広がり長期化する問題、4)白人と黒人の双方向に向かう否定的な評判の影響、5)評判の回復に不可欠なコミュニティの支援について指摘する。評判の生成と流布、その中で翻弄されるアイデンティティの姿は、現代アメリカ社会で今も続く人種的な偏見・相互不信のプロセスの一端を映し出している。

<<口頭発表>> (9月3日 10:00-10:30)

【8号館5F 854教室】

中国の北京・天津方言話者のコミュニケーション行動に関する一観察

羅 希

これまでの研究では、中国語母語話者におけるコミュニケーションにおいて、一人の話者が長時間ターンを占有すると考えられている。このようなことから、中国語母語話者のコミュニケーションにおいて、「静かに人の話を聞くことが礼儀だ」という結論が述べられている。しかし、筆者は中国の北京・天津地域で流行っている話芸「相声」に対する観察から、これまでの研究の結論に矛盾を感じた。多くの「相声」の断片において、ボケ役は、長時間でターンを占有するのではなく常に文を小切りでしゃべっており、ツッコミ役も、ポーズがあれば常に相づちななどの聞き手行動を取っている。そこで筆者は、北京・天津方言話者のコミュニケーション行動は中国の他の地域と異なると推測し、①北京・天津地域の方言話者はどのように会話に参加するか、②そのような会話参加の仕組みは日本語母語話者とどのように異なるかという2つの問題意識を持ち、調査を行った。

<<口頭発表>> (9月3日 10:35-11:05)

【8号館5F 854教室】

小学校「外国語活動」における英語の定着について
—非常に限定された言語文化的環境において第二言語定着がどこまで可能か—

堀尾 邦子

現在、公立小学校で実施されている「外国語活動」は、「聞く・話す」ことを中心に英語活動を多く体験することが主たる目的である。文字は指導しないし、学習内容の定着も求められていない。しかし、児童は限られた学習環境の中でも英語知識を学び、少しずつ定着している。M小学校の事例を基に、児童の英語力定着の様相を第二言語習得論の視点から分析する。特に、音声・語彙・表現統語・意味の定着について詳らかにする。調査時に英語を聞いて日本語で解答を書く場合と絵3択で解答する場合の理解度の差違についても言及する。さらに、塾で学ぶ児童と学校だけで学ぶ児童との英語力の差違についても調査・分析する。児童は、楽しく活動しているだけのように見える学習を通して、少しずつ英語能力を身に付けていると考える。

<<口頭発表>> (9月3日 11:10-11:40)

【8号館5F 854教室】

ろう児の読み書き実践の特徴
—高等学校に在籍するろう児の例から見る「合理的配慮」へのヒント—

中島 武史

本発表は、地域の高等学校に進学したろう児が直面する困難を「ことば」の側面から調査したものである。高校在籍のろう児は、「筆談」や「メール」「Line」などを介して音や声による情報を文字化・可視化しながら聴者の友達や教員とのコミュニケーションを成立させているケースが見られる。そのため、音や声の情報を文字化・可視化させるための戦略をもつ。本調査では、ろう児が行っている読み書き実践に焦点をあて、そこに見られる特徴と課題について筆者が行ったインタビューデータからまとめた。情報の可視化を図ろうとするろう児の試みからは、ろう児の主体的に生き抜く様子が確認できた。しかし一方で、それは常に成功するわけではない。上手く機能しない場合には何らかの困難をろう児は感じており、その課題を分析することで、高校段階のろう児を対象としたインクルーシブ教育における「合理的配慮」への具体的なヒントについて考察した。

<<口頭発表>> (9月3日 11:45-12:15)

【8号館5F 854教室】

台湾学校教育機関で郷土言語教育を受けた経験のある者の母語に関する言語意識調査

吳素汝

本稿は台北S小学校と嘉義D小学校の5年生の児童(計337名)、台南S大学の大学生(302名)を対象に、台湾における学校教育機関で郷土言語(閩南語、客家語や原住民語)教育を受けた経験のある者の母語に対する言語意識と郷土言語の使用について検討したものである。

その結果、国語が母語だと思っている若い世代は増えつつ、最初に学んだ言語が自らのエスニック言語ではなくても、エスニック言語も母語の一つとする傾向が見られた。また、児童と大学生とも国語が母語である理由としては「常用する言語」によることが最も多いのに対して、エスニック言語が母語である理由としては「親の言語」によることが圧倒的だと明らかになった。さらに、郷土言語は主に家庭内、特に祖父母に対して使われているが、親しい友人等に対しても使われるという話から、郷土言語は家庭言語でありながら、話し相手との人間関係を確立する役割をも担っている。

<<口頭発表>> (9月4日 10:00-10:30)

【8号館4F 843教室】

トラブルへの解決策提案と提案者
—「道順説明」を受ける人が果たす役割—

鹿嶋 恵

本発表では、「道順説明」という課題達成実験において、会話がうまく続けられなくなる状況(「トラブル」)が生じた場合、その解決に向けた相互作用において次の2点の解明を目指す。1)会話参加者の役割(説明者/被説明者)や属性(日本語母語話者/非日本語母語話者)の違いが課題達成効率に及ぼす影響。2)最終的にトラブル解決へと向かう解決策の提案者と提案方法、および課題達成効率との関係。3種の被験者組み合わせ(母語場面、接触場面Ⅰ、接触場面Ⅱ)による計30組の分析結果、次の2点を示す。a)課題達成効率は、非母語話者が被説明者になった接触場面Ⅱでは、他よりも長い時間を要した。b)最終的に解決へと向かう解決策の提案者は、母語場面と接触場面Ⅰでは、多くの場合被説明者がその役割を担ったが、接触場面Ⅱではそれが明確ではなかった。背景には、被説明者が非母語話者であることのハンディキャップが影響したことが考えられる。

<<口頭発表>> (9月4日 10:35-11:05)

【8号館4F 843教室】

日本語母語話者との接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動の管理

AKBARI HOURIEH

本研究では、日本に中・長期滞在するイラン人コミュニティーのペルシア語母語話者の日本人との儀礼的な接触場面での言語管理に注目する。ペルシア語話者の儀礼場面で深く浸透している「ターロフ」は相手に対し敬意を示したい場合の独特な言語行動ストラテジーである。

そこで彼らは、自然会話でターロフ的な言語行動規範(母語規範)を活用するのか、その影響はどう現れるのか。最後に第三者の視点から留意された逸脱の箇所と評価を検討する。対象場面は「店員と客」「大学内の職員と学生」「研究室内の学生同士」「近所同士」「店員同士」での会話になる。ペルシア語話者の母語規範の影響は、発話機能により異なりを見せていることが明らかとなった。

特に「場面を緩和させるための言語調整」「相手発話者との心的距離を縮める言語行動」ではターロフの影響が見られ、第三者の日本語話者は逸脱に対し否定的な評価を示していることも明らかになった。

<<口頭発表>> (9月4日 10:00-10:30)

【8号館4F 844教室】

ピア・レスポンスにおける第三者の参加について

吉 陽

ピア・レスポンス(以下PR)とは「作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交替しながら検討する活動である」(池田・館岡2007, p.71)。また, PRの形態について, 池田・館岡(2007, p.71)によると, 「2名から4名程度の小さいグループを作って話し合いを進めていく」。2名以上の学習者が参加するPRは集団コミュニケーションとなり, 作文の原稿における問題点について議論する場合, 問題点を指摘した読み手と作文の書き手以外には, 必ず観察者がいる。本研究ではこの観察者を第三者と呼ぶ。そして, 本研究の目的は会話分析という研究手法を用いて, PRにおける第三者がどのようにPRに参加するか, どのような役割を果たすのかを明らかにすることである。分析の結果として, 第三者は周縁的参加と中心的参加という2つの形式でPRに参加しており, 非常に重要な役割を果たしていることが明らかになった。

<<口頭発表>> (9月4日 10:35-11:05)

【8号館4F 844教室】

非定型的間接表現はなぜ「依頼」として成立できるのか
—会話参加者の視点から見る依頼の談話展開の分析—

李 欣穎

本研究は、依頼の談話展開において、一連の文から構成され、かつ明示的な依頼形式が使用されない「非定型的間接表現」を対象に、なぜそれが「依頼」として被依頼者に認識され、成立できるのかを考察するものである。

分析にあたり、39個の『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』より採集した依頼談話に見られた「非定型的間接表現」の展開パターンの考察を通し、依頼者はそれをどのように使用し、被依頼者はその発話をどう解釈するかを関連性理論の観点から考察した。

その結果、「依頼者による要件・理由の説明」はいずれの会話にも出現し、「依頼」の成立に不可欠な要素であり、談話展開の中で他の「切り出し」や「被依頼者への状況確認」の要素はそれを補強する働きを持つことが分かった。一方、被依頼者は一連の談話の発話解釈の過程で新たに加わったこれらの要素により、発話の解釈可能な範囲を限定し、相手の発話を「依頼」だと認識したと考えられる。

<<口頭発表>> (9月4日 10:00-10:30)

【8号館5F 852教室】

アングロフォンコミュニティにおける「義務を表わす英語表現」のバリエーションと変化

平野 圭子

本研究は日本のアングロフォンコミュニティ内の英語方言接触によって誘発される言語のバリエーションと変化を調査し、ソーシャルネットワークアプローチを用いて言語的アコモデーションを考察する。一時的な滞在を目的に来日した英語母語話者らによって構成されるコミュニティが研究対象で、「義務を表わす表現」(MUST, HAVE GOT TO, HAVE TO, GOT TO)に焦点を当てる。方言接触の初期段階においても、話者各々のネットワークの特徴がその話者の言語行動に影響を与えたと考える。様々な英語圏出身の英語母語話者から来日直後と一年後の2度にわたって計34時間の自然談話を収集し、約500個の「義務を表わす表現」を採取した。出身国別の分析の結果、「義務を表わす表現」の使用には国によってコンバージェンスとダイバージェンスの両方が見られ、個々の話者に観察される言語使用の変化はその話者個人のソーシャルネットワークに影響を受けることが判明した。

<<口頭発表>> (9月4日 10:35-11:05)

【8号館5F 852教室】

「曖昧性の所在」と「意図性の有無」による相互作用的ユーモアの区分
—テレビドラマの英語談話分析を通じて—

大竹 彩加

相互作用的ユーモア(Interactional Humor, Brône 2008)とは発話中の曖昧性を持つ要素を利用したユーモア現象であり、「曖昧性を持つ要素の所在」と「意図性の有無」を軸に、従来3種類に分類できるとされてきた。本研究はドラマコーパスの分析を通じてこの3種に加えて第4種類目の現象が存在することを主張する。相互作用的ユーモアを4種類に分類し考察した結果、登場人物別に「曖昧性の所在」に関係なく「意図的に」行う人物と「意図的でなく」行う人物との傾向が分かれていることも判明した。これにより、仲間内での相互作用的ユーモア使用の際に「意図性」を軸とした役割分担がなされていることが会話の流れの円滑さの一端を担っている可能性が示された。本研究はドラマスクリプトをデータとしたが、世界的人気を博した作品であるため、広く受け入れられ得るユーモア使用の分析例を提示していると考えられる。しかしながら自然会話への分析適用が今後の課題である。

<<口頭発表>> (9月4日 10:00-10:30)

【8号館5F 854教室】

丁寧表現の使用／不使用に影響する要因の分析

辛 昭静, 石崎 雅人

本研究は、依頼表現における言語スタイルの選択(丁寧表現の使用／不使用)に影響する要因究明を目的とし、計412人(男性282人, 女性284人)を対象に質問紙調査を実施した。被調査者には、「入社同期(年下・同性)にコピーを依頼する場面(話し手の立場), 依頼される場面(聞き手の立場)」を提示し、①丁寧表現の使用と不使用のどちらが望ましいかの判断, ②各表現に対する簡潔性, 丁寧さ, 自然さ, フレンドリーさの評価, ③丁寧表現の不使用に関する被調査者の考えを尋ねた。分析には、二項検定とロジスティック回帰分析を行った。その結果、①話し手と聞き手, それぞれの立場により「丁寧表現の使用／不使用」のスタイル選択と評価が異なること, ②丁寧表現使用に対する「よそよそしさ」と丁寧表現不使用に対する「違和感」が強い影響をもつ要因であること, ③相手と親しくなったという認識のもとに丁寧表現の不使用が許容されること, がわかった。

<<口頭発表>> (9月4日 10:35-11:05)

【8号館5F 854教室】

だれがいつどこで何のために通訳を使うのか
—日英ビジネス通訳の事例から—

木村 護郎クリストフ, 高橋 絹子

通訳をほとんどとりあげてこなかった媒介言語論・言語管理研究と, 社会言語学的に通訳を位置づけていない通訳研究のはざまにあるすきまに注目し, 通訳という手段の特徴に関する社会言語学的研究を行う必要性を認識したことが本研究の出発点である. 本研究においては, 住民の大多数が原則として英語の学習経験をもつと想定される日本において, 通訳を用いる場面と当事者が直接英語でやりとりをする場面がみられるビジネスの接触場面において, 英語通訳がどのような場面でどのような意識・意図をもってどのように用いられるかを通訳者へのインタビューに基づいて考察する. そのことよって, 通訳という形態がもつ付加価値や限界を明らかにすることで通訳研究における役割論に新しい知見をもたらすとともに, 媒介言語論・言語管理研究に通訳を位置づけて通訳という手段の適切な利用の手がかりを得ることをめざす.